

## 〈文化学分野〉

授業科目名	担当教員名	学年	単位数	授業科目名	担当教員名	学年	単位数
○表象文化史特論A	松友 知香子	1・2	2	○北方文化史特論A	川上 淳	1・2	2
○表象文化史特論B	松友 知香子	1・2	2	○北方文化史特論B	川上 淳	1・2	2
○言語特論A	濱田 英人	1・2	2	日本文学史特論A	田中 幹子	1・2	2
○言語特論B	濱田 英人	1・2	2	日本文学史特論B	渡辺 さゆり	1・2	2
異文化コミュニケーション特論A	(本年度休講)	1・2	2	○比較文化特論ⅠA	張 偉雄	1・2	2
異文化コミュニケーション特論B	(本年度休講)	1・2	2	○比較文化特論ⅠB	張 偉雄	1・2	2
○身体文化特論A	瀧元 誠樹	1・2	2	○比較文化特論ⅡA	小笠原はるの	1・2	2
○身体文化特論B	瀧元 誠樹	1・2	2	○比較文化特論ⅡB	小笠原はるの	1・2	2
○画像学特論A	浅川 泰	1・2	2	○比較歴史特論ⅠA	高瀬 奈津子	1・2	2
○画像学特論B	浅川 泰	1・2	2	○比較歴史特論ⅠB	高瀬 奈津子	1・2	2
○日本文学特論ⅠA	荒木 奈美	1・2	2	比較歴史特論ⅡA	(本年度休講)	1・2	2
○日本文学特論ⅠB	荒木 奈美	1・2	2	比較歴史特論ⅡB	(本年度休講)	1・2	2
○日本文学特論ⅡA	田中 幹子	1・2	2	先史文化特論ⅠA	(本年度休講)	1・2	2
○日本文学特論ⅡB	田中 幹子	1・2	2	先史文化特論ⅠB	(本年度休講)	1・2	2
日本文学特論ⅢA	(本年度休講)	1・2	2	○先史文化特論ⅡA	瀬川 拓郎	1・2	2
日本文学特論ⅢB	(本年度休講)	1・2	2	○先史文化特論ⅡB	瀬川 拓郎	1・2	2
○日本語特論A	渡辺 さゆり	1・2	2	○先史文化特論ⅢA	川名 広文	1・2	2
○日本語特論B	渡辺 さゆり	1・2	2	○先史文化特論ⅢB	川名 広文	1・2	2
日本史特論A	(本年度休講)	1・2	2	先史文化特論Ⅳ	千本 真生	1・2	2
日本史特論B	(本年度休講)	1・2	2	考古学専門実習	(本年度休講)	1・2	2
○北方文化特論ⅠA	常本 照樹	1・2	2	文化財の保存活用特論	(本年度休講)	1・2	2
○北方文化特論ⅠB	常本 照樹	1・2	2	文化学特論	南山 雅樹	1・2	2
○北方文化特論ⅡA	本田 優子	1・2	2				
○北方文化特論ⅡB	本田 優子	1・2	2				

## 〈地域経営学分野〉

授業科目名	担当教員名	学年	単位数	授業科目名	担当教員名	学年	単位数
○企業文化の国際比較特論A	汪 志平	1・2	2	○マーケティング特論A	角田美知江	1・2	2
○企業文化の国際比較特論B	汪 志平	1・2	2	○マーケティング特論B	角田美知江	1・2	2
○事業創造論特論A	佐藤 郁夫	1・2	2	○企業経営と財務諸表特論A	岩橋 忠徳	1・2	2
○事業創造論特論B	佐藤 郁夫	1・2	2	○企業経営と財務諸表特論B	岩橋 忠徳	1・2	2
○地域活性化特論A	中山健一郎	1・2	2	○情報科学特論A	伊藤 公紀	1・2	2
○地域活性化特論B	中山健一郎	1・2	2	○情報科学特論B	伊藤 公紀	1・2	2
○地域経済学特論A	武者 加苗	1・2	2	地方自治特論A	武岡 明子	1・2	2
○地域経済学特論B	武者 加苗	1・2	2	地方自治特論B	武岡 明子	1・2	2

〈文化学分野〉

授業科目名	担当教員名	学年	単位数	授業科目名	担当教員名	学年	単位数
表象文化史特別演習A	松友 知香子	2	2	北方文化特別演習II A	本田 優子	2	2
表象文化史特別演習B	松友 知香子	2	2	北方文化特別演習II B	本田 優子	2	2
言語特別演習A	濱田 英人	2	2	北方文化史特別演習A	川上 淳	2	2
言語特別演習B	濱田 英人	2	2	北方文化史特別演習B	川上 淳	2	2
異文化コミュニケーション特別演習A	(本年度休講)	2	2	比較文化特別演習IA	張 偉雄	2	2
異文化コミュニケーション特別演習B	(本年度休講)	2	2	比較文化特別演習IB	張 偉雄	2	2
身体文化特別演習A	瀧元 誠樹	2	2	比較文化特別演習II A	小笠原はるの	2	2
身体文化特別演習B	瀧元 誠樹	2	2	比較文化特別演習II B	小笠原はるの	2	2
日本文学特別演習IA	荒木 奈美	2	2	比較歴史特別演習IA	高瀬 奈津子	2	2
日本文学特別演習IB	荒木 奈美	2	2	比較歴史特別演習IB	高瀬 奈津子	2	2
日本文学特別演習II A	田中 幹子	2	2	比較歴史特別演習II A	(本年度休講)	2	2
日本文学特別演習II B	田中 幹子	2	2	比較歴史特別演習II B	(本年度休講)	2	2
日本語特別演習A	渡辺 さゆり	2	2	先史文化特別演習II A	瀬川 拓郎	2	2
日本語特別演習B	渡辺 さゆり	2	2	先史文化特別演習II B	瀬川 拓郎	2	2
日本史特別演習A	(本年度休講)	2	2	先史文化特別演習III A	川名 広文	2	2
日本史特別演習B	(本年度休講)	2	2	先史文化特別演習III B	川名 広文	2	2
北方文化特別演習IA	常本 照樹	2	2				
北方文化特別演習IB	常本 照樹	2	2				

〈地域経営学分野〉

授業科目名	担当教員名	学年	単位数	授業科目名	担当教員名	学年	単位数
企業文化の国際比較特別演習A	汪 志平	2	2	マーケティング特別演習A	角田美知江	2	2
企業文化の国際比較特別演習B	汪 志平	2	2	マーケティング特別演習B	角田美知江	2	2
事業創造論特別演習A	佐藤 郁夫	2	2	企業経営と財務諸表特別演習A	岩橋 忠徳	2	2
事業創造論特別演習B	佐藤 郁夫	2	2	企業経営と財務諸表特別演習B	岩橋 忠徳	2	2
地域活性化特別演習A	中山 健一郎	2	2	情報科学特別演習A	伊藤 公紀	2	2
地域活性化特別演習B	中山 健一郎	2	2	情報科学特別演習B	伊藤 公紀	2	2
地域経済学特別演習A	武者 加苗	2	2				
地域経済学特別演習B	武者 加苗	2	2				

※1 修了要件は32単位以上。専攻科目4単位を含め、1年次で20単位以上を修得すること。

※2 特別演習(修士論文の指導)を履修するためには、課程修了予定の前年度末までに20単位以上を修得していなければならない。

※3 ○印の科目から1科目を専攻科目として履修すること。

講義開講時間

1講時	2講時	3講時	4講時	5講時	6講時	7講時
9:00~10:30	10:40~12:10	13:00~14:30	14:40~16:10	16:20~17:50	18:00~19:30	19:40~21:10

## 〈文化学分野〉

表象文化史特論 A・B	松友知香子	E・H・ゴンブリッジ(1909-2001)は、ウィーン大学に学び、以後ロンドンのウォーバーグ研究所で芸術研究を行った美術史家である。この授業では、彼の論文やエッセイ、講演をまとめた『樺馬考』を精読し、芸術のシンボルやメタファー解釈における心理学的・精神分析学的方法について考察を行い、欧米の表象文化を通して、国際理解力を高める。
言語特論 A	濱田 英人	本特論では、ことばと認識について知覚作用と認識作用の視点から考察する。具体的には知覚対象の認識から言語化に至る過程でどのような知覚操作が関わっているのかについて理解を深める。我々は、対象物を知覚することそれは目の網膜から脳内に取り込まれることで表現(representation)が生じ、それを言語化の対象としている。このことから言語は脳内現象であり、知覚対象の言語化には認知主体の一定の認知処理が必然的に関与している。その認知処理のメカニズムを明らかにすることによって言語の本質について理解を深める。
言語特論 B	濱田 英人	本特論では、前期の基礎研究を踏まえて、言語話者の事象認識の在り様と言語化の関係を具体的な言語現象を考察することによって明らかにする。 具体的には、言語話者が基本的な認知能力を活性化して世界をどのように切り取っているかが個別言語を特徴付けていることを日本語と英語の言語現象を対照的に考察することによって明らかにする。
身体文化特論 A・B	瀧元 誠樹	演出家であり教育者であり、思想家でもあった竹内敏晴氏が語られてきた「ことば」が、「竹内敏晴の『からだ思想』」というセレクションに編集されて2013年9月から2014年6月にかけて刊行された。哲学者である木田元の言葉によれば、竹内のそれは『からだ』によって裏打ちされた『ことば』だという。戦前から戦後の動乱期、さらに学生運動や「アングラ」、東西冷戦の終結とバブル崩壊といった激動の社会変化の中で、私たちのからだはことばはどのように変わってきたのかを語る竹内の「ことば」に耳を澄ましてみたい。
図像学特論 A・B	浅川 泰	今日のイメージの時代を先取りするかのようにイメージ研究の方法を美術史の分野で開拓したのは、美術史家アビ・ヴァールブルクであった。アーウィン・パノフスキーが「人文科学の各分野が、互いに他の分野の侍女として仕えるのではなく、共通の場で出会う」シンボル(文化的徴候)学として発展させたことはよく知られている。 このシンボル学は、20世紀の文化研究の新たな方法として生まれたのであるが、その代表的成果が哲学者エルンスト・カッシーラーの言語や思考のシンボル形式の探究であり、また精神医学者ジークムント・フロイトの夢理論、言語哲学者フェルディナン・ド・ソシュールが示唆した一般記号研究もシンボル学としてみるができるだろう。 本授業では、イメージメディア(文学、美術、写真、映画、マンガ、アニメーション、身体表現、神話・ファンタジー、儀礼・モード、身体表現等)の分析や解釈について理解をふかめるため、イメージ・シンボル・記号の機能や意味について学習する。
日本文学特論ⅠA・B	荒木 奈美	1 身体知をキーワードにした諸学分野の知見から、文学教育の可能性を広げる。 2 文学と、学習者の実体験及び実社会との関連性を模索する中で、実学としての国語教育を問い直す。 3 学校教育における実践を意識した教育活動例を積み重ねる。
日本文学特論ⅡA・B	田中 幹子	『源氏物語』の各巻の内容を把握した上でその巻の核となる歌を取り出し分析する。
日本語特論 A・B	渡辺 さゆり	近世の国学者・本居春庭の『詞八衢』は動詞活用に関する文法書である。五十音図の各行ごとに活用表を掲げ、また必要な語について古典作品中の証例を記載し説明を施している。本講義ではくずし字で書かれた『詞八衢』の序文・本文を読みながら、春庭の人となりや『詞八衢』の概略について学習する。

北方文化特論ⅠA・B	常本 照樹	日本及び日本に関連の深い諸国の先住民族政策を比較し、先住民族に係る法政策の特殊性と普遍性を理解することにより、民族共生社会の実現に深く貢献できるようになることを目的として、アメリカ合衆国におけるインディアン法制、ハワイ先住民法制及び台湾の原住民族法制に関する和文及び英文文献を精読し、日本のアイヌ施策推進法等と比較して、その特殊性と普遍性を内在的に理解するように努める。
北方文化特論ⅡA・B	本田 優子	アイヌ文化については、近年、学校教育でも取り上げられつつあるが、それでもなお、概論的なものにすぎない。 この授業では、アイヌの世界観について体系的にまとめられている、中川 裕『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界一』をテキストとして講読することにより、アイヌ文化全般についての理解を深めていく。その際、伝統的アイヌ社会と現代のアイヌ社会とを区別して理解することの重要性も認識するように留意する。
北方文化史特論 A・B	川上 淳	北方古代史について、最新の研究成果による論文・著書を講読し討論する。具体的には北海道・東北地方・東部ユーラシアの「北の財」の実態と、歴史的・文化的意義を最新の古代史・考古学研究の成果から実証的に検討する。
比較文化特論ⅠA	張 偉雄	比較文化という学問は、一国一民族の文化を越えた文化事象を考察するものである。本講義は近代日中の文化人を対象に彼らは如何にして自文化を越え異文化に出ていくのか、そして異文化の中で如何に行動をしていたのかを考察してみる。考察の対象は彼らの残された作品である。これらの作品を比較文学文化の手法で解読し、比較文学文化研究の対象、方法、目的、および研究者のあるべき姿勢について論じる。(中国語の読解力が必要)
比較文化特論ⅠB	張 偉雄	比較文化研究の方法の一つとして「翻訳研究」がある。これは文化間の交流、受容、変容を考察する有効な手段である。翻訳の変容や「曲解」を指摘することによって、異文化に位置する原作者、翻訳者、或いはその両文化に位置する読者層に対する認識を深めて行く事ができ、異文化理解につながるものである。本講義ではイギリスの東洋学者、翻訳者であるArthur Waleyを中心に、翻訳を通して異国の文化が受容され、変容されていく実態を分析してみる。(英語・中国語の読解力が必要)
比較文化特論ⅡA・B	小笠原はるの	この講義では、人と人が互いに理解しあうためのコミュニケーションの手法として、ナラティブ研究について学ぶ。わたしたち人間にとってナラティブ(物語)は、それがどれだけ傷つきやすく不完全なものであっても、わたしたちがお互いにもっとも近づきあえる可能性として存在する。 人が生きていく中で、わたしたちは人生のある部分については、それを生きてはいるが、それを経験してはいない。というのも、経験するためには語りの形式が必要だからである。その語りは、多くの場合、それを語ろうとすることを妨げる力、例えば、聴き手との応答関係、トラウマとなる経験の深さ、共同体の中での語りの経験知などによって変容する。 人々が語ろうとしている物語はどのような物語か、またその語りを妨げようとしているものは何かを問うことで、語り手は、それまでの自分のものといえなかった経験を自分のものだということができるようになり、さらに人々が互いの物語を知ることによって、人と人、人と社会とのつながりを生み出すことができるようになる。各自の問題意識を持ち寄り、ナラティブの諸相や揺らぎ、可能性についての考察を深めたい。
比較歴史特論ⅠA・B	高瀬 奈津子	隋唐時代は、中国史上、政治・社会経済・文化の面で最も華やかだった時代である。本授業では、東部ユーラシア地域における隋唐王朝の位置づけを理解し、隋唐時代の中国社会・文化の多様性を理解することを目的に、隋唐史研究の古典的論考である陳寅恪著『唐代政治史述論稿』を読み、あわせて引用されている史料を分析しながら、歴史研究の手法を学ぶ。
先史文化特論ⅡA・B	瀬川 拓郎	考古学・人類学・民族学・生態学などを横断し、アイヌ民族の歴史にアプローチするアイヌ民族考古学の理論と方法を理解することで、国際的な社会文化活動や地域振興に寄与貢献する専門職・指導者に必要な専門的知識と考察力を習得する。

## 教員紹介



地域・文化学研究科 文化学専攻 教授  
瀬川 拓郎 Segawa Takuro

## 担当科目

先史文化特論IIA・B、先史文化特別演習IIA・B

## 01 プロフィール

高校時代、郷土研究部で発掘調査を体験。部の先輩で考古学者の故石附喜三男先生(札幌大学)のもとへ通い、先生の教えに従って西日本の大学で考古学を学びました。週末になると通った、火山灰が剥き出しの札幌大学の丘の風景を懐かしく思い出します。その後、旭川市役所で文化財保護を担当し、博物館勤務を経て2018年に札幌大学へ。学生たちから大きな刺激を受ける毎日です。

## 02 研究分野紹介

アイヌ民族の歴史を考古学から研究しています。きっかけは、旭川で発掘調査を担当した1千年前の集落遺跡。その小さな村の成り立ちについて徹底的に考えるなかで、本州との交易によって劇的に変化した北海道の古代社会の実態がみえてきました。自然と共生する平和な人びとというイメージで語られるアイヌ民族ですが、広大な北東アジア世界に次々進出し、中国の元の王朝とも戦った、歴史のなかのかれらの多様な姿に心を躍らせています。

## 03 地域・文化学研究科の特色

アイヌ語・アイヌ文化・アイヌ史・北方史・北海道考古学・先住民学など、北海道やアイヌ民族の歴史や文化についてみずからの学びを深める多くの講義が用意されています。比較文化や異文化コミュニケーションなど文化にかんする多彩な学びと、それぞれの先生との対話を通じて、より広い視野から自身の専門研究を相対化し、普遍的で先端的な問題意識を育むことができるのも、本学の地域・文化学研究科の特色です。

## 04 大学院生活で学んでほしいこと

研究の楽しさは、大学院ではじめて実感できるものかもしれません。研究科のスタッフは、そのためのサポートに力を注いでいますが、楽しさは誰かから与えられるものではありません。寝ても覚めても日々問題を考え続ける地道な道のりの向こうに、誰も目にしたことのない世界が広がっています。自分の発想にこだわり続けること、それは自分の力を信じることでもあります。どうか自信をもって大学院での学びに取り組んでください。

先史文化特論III A・B	川名 広文	(東南アジアの先史文化) 東南アジアの先史時代は、熱帯という異なる生態環境にありながらも、先進の中国文明の影響を受ける歴史地理的環境にあった点、また古代国家成立の基盤が水稻農耕にあったこと、さらに完新世には島嶼部を形成したなどの諸相において、日本列島のそれとの共通性がみられる。東南アジアにおける先史文化・社会の動態を比較考古学的な視点から検討していく。
先史文化特論IV	千本 真生	この授業では、欧米考古学研究の歴史について要点をおさえながら、ヨーロッパのバルカン地域における先史文化について学ぶ講義形式の授業である。時代の範囲は旧石器時代から青銅器時代までを対象とする。アジアと内陸ヨーロッパのあいだに位置するバルカン半島では、独自の先史文化が開花した。ヨーロッパ先史研究においてとくに重要な歴史的出来事に、農耕牧畜の導入、牧畜集団の移動と拡散、黄金文明の繁栄、古代都市文明の波及などが挙げられる。 授業では最新の調査成果も紹介しながら、ヨーロッパ古代社会の基礎をなすバルカン先史文化について講ずる。
文化学特論	南山 雅樹	本講のテーマは、「文化の融合」です。音楽を鑑賞し、その成り立ちを分析・紹介します。主としてジャズ、クラシックを採り上げ、その歴史の変遷、どのような文化が融合して生まれたのかを検証し、ポピュラー音楽全般への影響についても考察します。

## 〈地域経営学分野〉

<p>企業文化の 国際比較特論 A・B</p>	<p>汪 志平</p>	<p>社会の中で企業はどうあるべきかどう行動すべきかについて、文化的なアプローチと国際的なアプローチを用いて企業倫理を捉え、21世紀のあるべき企業像を理解する。さらに、現代の企業倫理とコーポレート・ガバナンスについて国際比較を通じ理解を深める。</p>
<p>事業創造論特論 A・B</p>	<p>佐藤 郁夫</p>	<p>激変する社会経済に適応可能な人材へと成長するためには事業活動への深い理解と幅広い知識が不可欠になっています。本特講では、様々なビジネスモデルに関する知識を広めることや議論を通じて、企業経営における事業創造の構想力とその消化吸收を目標にしています。</p>
<p>地域活性化特論 A・B</p>	<p>中山 健一郎</p>	<p>本授業では、地域経営に焦点を当て、地域の活性化とは何か?またどうあるべきかについて考察する。特にSDGsやCOVID-19に起因する北海道スタイルに対して地域経営はどう変化し、どう対応すべきなのかを考察する。特に、本授業は生産管理論、品質管理論、希望学入門を取り入れたレジリエンス、ニューノーマル、パラダイムシフトの視点から考察する。</p>
<p>地域経済学特論 A・B</p>	<p>武者 加苗</p>	<p>本講義では、地域経済学、都市経済学、財政学、農業経済学とその関連・発展分野を、近代経済学の立場から学ぶ。同じ通貨・法制度を持つ一国内であっても、行政区域や輸送コストの存在を考慮すると、その経済状況は一様ではない。一般に、地域経済ではヒト・モノの移動が容易であり、国際経済より開放的である。最終的には、修士論文の作成に必要な基礎的な地域経済のモデル及びその考え方を修得する。なお、テーマは参加者の関心を考慮して対応する</p>
<p>マーケティング特論 A・B</p>	<p>角田 美知江</p>	<p>本講義では、文献の輪読を通じて、マーケティングの概念を理解し、研究への分析視点を得ることを目的としています。また、輪読を通じて得た知見を活かし、地域の中小規模企業におけるマーケティングについて議論します。また、文献の輪読、事例の議論、プレゼンテーションを通じて、理解を深めていきます。</p>
<p>企業経営と 財務諸表特論 A・B</p>	<p>岩橋 忠徳</p>	<p>企業によって作成および開示される財務諸表は、各種の利害関係者が企業経営に関連する様々な意思決定を行ううえで非常に有用である。財務諸表に包含されるB/S、P/L、C/F、S/Sといった各財務表の計算構造を学んだうえで、それらの財務表が作成ならびに開示される根拠となる諸会計基準について考察する。また、企業経営において財務諸表を実践的に活用するために、有価証券報告書等を用いた経営分析の理論や技法についても考察する。</p>
<p>情報科学特論 A・B</p>	<p>伊藤 公紀</p>	<p>近年、AI(Artificial Intelligence, 人工知能)が発達し、社会の様々な分野でその利用が求められつつある。コンピュータに問題解決をさせるためには、その解法をアルゴリズムとして表現しなければならない。AIも同様である。身の回りにおける膨大なデータから情報を取り出す統計的手法や、情報をコンピュータが扱うことのできる知識とするためのアルゴリズムについて理解を深めていく。</p>
<p>地方自治特論 A・B</p>	<p>武岡 明子</p>	<p>地方自治体は私たちにとって最も身近な「政府」であり、様々な行政サービスを提供する一方で時に私たちの権利を制限し義務を課す権力的な存在でもある。分権型社会と言われて久しいが、複雑多様化する行政需要にどう対応するか、国との役割分担のあり方、首長のリーダーシップ、議員のなり手をどう確保するかなど、自治体を取り巻く環境は年々、厳しさを増している。本特論では、地方自治が直面する現状と課題について学び、その改革方策について検討する。</p>

## 歴代修士号学位論文題目

平成15(2003)年度から

## 【平成15(2003)年度】

- ・長崎原爆爆心地・浦上の記憶をめぐる考察
- ・田上義也の戦後期の建築活動
  - －コースホテルと北海道銀行の建築を中心として－
- ・中村正直の異文化論考
- ・日中両国における端午節の変容に関する考察
  - －七・八世紀を中心に－
- ・北海道の細石刃石器群における黒曜石露頭直下での石器製作技術
  - －白滝村幌加沢遺跡遠間地点の検討－
- ・メディアと寺山修司
  - －挑発するテキストと読者論のはざまに－
- ・声ニナヌ声 トリン・T・ミンハ論

## 【平成16(2004)年度】

- ・社会的監視の系譜学的考察
  - ～監視社会論の研究手法についての試み～
- ・北海道における石刃石器群の適応戦略
  - －黒曜石石材の獲得とその消費過程－
- ・環状土籬の研究
  - －属性の系統・構築技術・分節構造を中心に－
- ・北海道における細石刃文化前半期の石器群の様相
  - －新たな技法類型をもとにした細石刃製作技術の一考察－
- ・遺骨発掘返還運動に関する研究
  - －北海道朱鞠内の事例を中心に－
- ・源氏物語における権威
  - ～柏木の人物論をめぐって～
- ・『かげろふ日記』における引歌からみる道綱母
  - －主題形成との関連から－
- ・ギュスターヴ・モローのサロメと仏教美術
- ・コミュニケーションとしての演奏
  - －複合的音楽意味への眼差し－
- ・北東アジアにおける海上安全保障問題に関する一考察
  - －日本・韓国を中核とする事例として－
- ・母子沢寛の作品における周縁化された人物の近代史
- ・日本における「肉」と「肉食」考
- ・国会議事堂の比較研究の試み
- ・旧石器時代における石材獲得戦略の研究
  - －特に北海道西部の頁岩原産地について－
- ・韓国映画の現在
  - －『ブラザーフッド』を切口にして
- ・戦略としてのテレビジョンと広告としての戦争
  - －湾岸戦争の時の「油まみれの水鳥」と「ナイラ証言」のような映像シーンはどのようにして生まれたのか
- ・広告映像における表象行為とアイデンティティをめぐる政治学
- ・日中蚕神物語の文化形態に関する比較文化的考察
  - 蚕神物語における日中文化の相違点と共通点について

## 【平成17(2005)年度】

- ・『日本霊異記』と經典の関連性について
- ・人形アニメーションにおける新たなリアリティの誕生とその可能性
- ・火葬場のデザインに関する一考察
- ・「障害」から「文化」へ
  - ろう者の手話とその思考についての考察
- ・内山完造の異文化体験に関する研究
- ・源氏物語の人物造型に見られる美意識
  - －紫上像の比喩表現を通して－
- ・孫晋泰の「朝鮮民謡集」研究
  - －中村亮平の「朝鮮童話集」との比較・分析－
- ・カレル・タイゲ
  - チェコモダン・アヴァンギャルドと引用の魔術

## 【平成18(2006)年度】

- ・朝鮮近代史における急進的開化派についての一考察
  - ～開化派の誕生から甲申政変まで～
- ・歴史教科書における「正しさ」にひそむ問題
  - －教員の視点と教科書記述の相同性と差異－
- ・「オシラ神」信仰の担い手とその展開
  - －近代北海道を事例として－
- ・日露戦争への道程の一考察
  - －日英同盟と日露交渉を中心に－
- ・親日派一考察 宋秉峻の生涯とその時代－

- ・カタカナ語使用の一面からの考察
  - －カタカナ語の役割とカタカナ語教育－
- ・郭沫若の異文化体験と受容
  - －『女神』の創作から見る－
- ・植民地朝鮮の「プロ文学」に関する一考察
  - ～1926年から1938年までの朝鮮人作家の日本語評論作品や朝鮮における「読書大衆の状況」を手がかりに～
- ・異文化の人間関係
  - －在中日系合弁企業における職場観の比較
- ・非母語創作の意味と属性
  - －アメリカにおける中国系新移民作家ハ・ジンを読んで－
- ・岡千仞の中国における異文化体験について
- ・北海道縄文時代の動物意匠遺物
  - －表象されたモノからみえる人と動物とのかかわり－

## 【平成19(2007)年度】

- ・日本上代文学から見た色彩文化
  - －中国五色観念との比較を通じて－
- ・明治40年代の北海道における教育的野球観の形成過程に関する一考察
  - －『野球書論争』と安部磯雄の思想に着目して－
- ・『五輪書』における身体観について
  - ～「拍子」に表れる宮本武蔵の意図を探る～
- ・『イヨマンテ』像の変遷
  - －儀礼研究に動いた力学と儀礼呼称の関係－
- ・近世アイヌ文化期における動物骨集積の研究貝塚・獣骨集中の分析からみる集落構造の検討
- ・『類聚神祇本源』『天地開闢篇』における分析
- ・『紅樓夢』の日本語訳に関する研究
  - －伊藤漱平訳前八十回を中心に
- ・大連の都市形成と都市観光に関する研究
- ・中世日本陰陽道について
  - －『蓋鑑内伝』『蓋鑑抄』を中心に
- ・氷心の日本における異文化体験について
  - －1946年から1951年までの日本論を通して
- ・曾根俊虎の中国における異文化体験について
  - －『北支那紀行』『清国漫遊誌』を通して
- ・中国と朝鮮戦争～参戦理由に関する一考察～
- ・内モンゴルの生態環境と遊牧の変遷
  - ～その相関性に関する一考察～
- ・近世日本と中国における琉球の位置

## 【平成20(2008)年度】

- ・北海道産の天然秋サケの需給の現状と今後の展望
- ・環状土籬を残した社会の生業的分析
  - －北海道縄文時代後期後葉の墓制からみた研究－
- ・沖繩諸島グスク時代の農耕システム
  - －フロレーション法を用いた炭化種子研究－
- ・日本語との比較における韓国語の数量表現
  - －ゼロ助数詞構文を中心に－
- ・北洋艦隊と聯合艦隊の比較考察
  - －日清戦争における制海権問題を中心に－

## 【平成21(2009)年度】

- ・「百人一首うばがえとき」における葛飾北斎の絵画化意識
- ・北海道における土器文化成立の様相に関する研究
  - －特に道東部平底土器群について－
- ・『西遊記』の日本語訳に関する研究
  - －完訳本に見える翻訳の限界と可能性
- ・中国人への日本語教育における教育方法の研究
  - ～多様化する学習者のニーズを大切に「グループワーク」の試み～
- ・横断するフィギュアアートとサブカルチャーの境界で－

## 【平成22(2010)年度】

- ・映画『TRANSFORMERS』から見る現代ロボットの表現性と身体性
- ・日本語の受身文について
  - －中国語話者への日本語教育の観点から－
- ・『東海道中膝栗毛』における中国文化
  - －麻生磯次校注を基にして
- ・吉田巖のアイヌ研究と教育の関係性について

## 【平成23(2011)年度】

- ・オノマトペの音と意味の関連性について
  - －非母語話者のために－
- ・受身表現における日・越対照研究
  - －両言語の教育の為に
- ・芥川龍之介の中国における異文化体験
  - －『支那遊記』を中心に
- ・ホエン族におけるクマ送り儀礼の研究
  - －『詞八韻』における証例の典拠についての考察
- ・再祚した女帝の比較

## 【平成24(2012)年度】

- ・復興における被災観光地の役割
  - －松島と周辺地域を事例として
- ・日本語との比較における中国語の数量表現
  - －人間の体を表す言葉を用いた量詞を中心に

## 【平成25(2013)年度】

- ・北海道東部地域におけるアイヌの伝統的葬送儀礼
  - －史料源蔵資料『コタン探訪帳』に基づいて－
- ・道北・道東部における擦文土器の比較研究
  - ～羽幌町ライベツA遺跡の資料の検討をもとに～
- ・ゼロ世代～10年代を生きる若者についての一考察
  - －朝井リョウ『何者』を通じて明らかにする若者像－
- ・中国語の「的」と日本語の「の」の比較対照研究
  - －連体修飾助詞としての用法を中心に－
- ・授受本動詞の日中対照研究
  - －日本語「もらう」の中国語の対応問題を中心に－
- ・夏目漱石の中国観についての考察
  - －『満韓ところどころ』を中心に
- ・アイヌ社会におけるオットセイ猟の変遷
  - －蝦夷地と北興諸国を中心に－

## 【平成26(2014)年度】

- ・現代の名づけについて

## 【平成27(2015)年度】

- ・よしもとぼなな作品に描かれた「人間」に属する人々のつながりについて～短編集「さきちゃんたちの夜」に描かれた人間関係を中心に
- ・芥川龍之介と『聊齋志異』－その受容と創造
- ・夏目漱石『ころも』論－罪意識を中心に－
- ・蝦夷錦の交易と紋様の年代観
- ・ナラティブとリフレクションによる「当事者」の自己発見
- ・アイヌのシカ認識－口承文芸を中心に－
- ・アイヌ文化におけるイヌの役割

## 【平成28(2016)年度】

- ・ソ連軍の南千島進駐と残留島民

## 【平成29(2017)年度】

- ・伊能大因蝦夷地部分における伊能と間宮の関係
- ・宮澤賢治童話における割り切れない感情とそこから照射された読者自身の思考形態の問題
- ・戦前期北海道と樺太における土工部屋の歴史的位置づけ
  - －1905年～1935年を中心に－
- ・近世後期後志地方におけるアイヌと人間の関係について
  - －ヨイチ・ラタスツ・インヤを例に－
- ・月寒の忠魂納骨塔－歩兵第二十五聯隊と月寒の人々－

## 【平成30(2018)年度】

- ・「自己」とは何かを問うこと
  - －＜他者＞から見える内面的「自己」への問い－

## 【令和元(2019)年度】

- ・前期幕領期のアイヌ風俗改変における最上徳内の影響
- ・『源氏物語絵巻』について
  - －「源氏物語」に込めた絵師の思いを探る－
- ・パレエ作品『春の祭典』の魅力とは何か
  - －ニジンスキー、ベジャール、パウシュの作品に着目して－